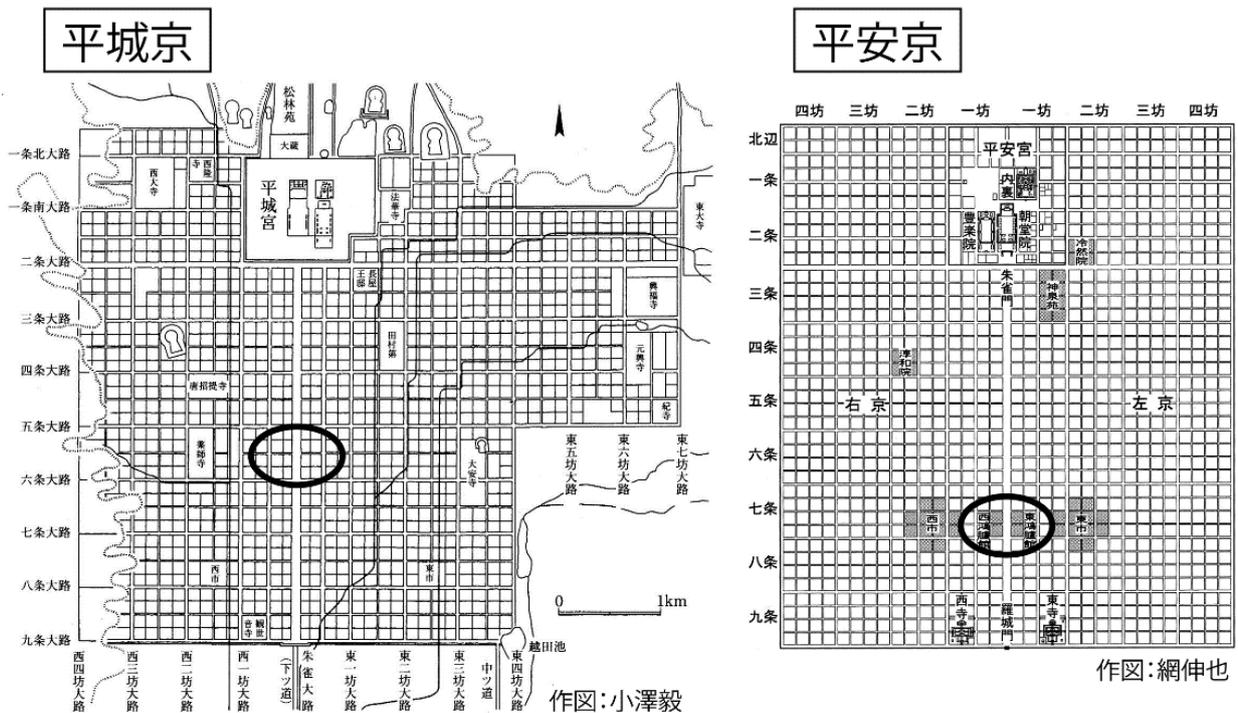


(5)客館の機能と構成

客館は、外国使節に宿泊・食事を提供した施設で、時に遣唐使も利用した。『日本書紀』によれば、古くから大阪湾沿岸の難波津（大阪）に難波館が設けられ、瀬戸内海を渡ってきた外国使節を安置した。難波館は奈良～平安時代にも引き継がれるが、このころ宮都内にも客館・鴻臚館が設けられたことが知られる。平安京鴻臚館は朱雀大路沿いの七条に設けられ、平城京客館（『続日本紀』天平4年（732）10月癸酉条）は詳らかではないものの朱雀大路沿いに置かれた可能性が指摘されている（岸俊男 1988）。朱雀大路沿いの客館は、唐長安城の鴻臚客館（皇城内、朱雀門と含光門の間）や、古くは北魏洛陽城の四夷館（朱雀大路の延長両脇と推定）などあり、中国系都城ではある程度定まっているようである。

このように、奈良～平安初期には沿岸部と宮都都城内に客館が設けられたことが知られるが、いずれも施設の構造や使用のあり方については、日本の史資料ではほとんど復元することができない。ただ当時の日本は、東アジア諸国と同様、唐の政治・文化を積極的に受容しており、国際標準であった唐の賓礼が導入され、その作法に基づく宮都構造や客館構造があわせて導入されたことは容易に想像される。

日本が導入した客館の原型とみられる唐長安城の皇城内にある鴻臚客館については、発掘調査は行われていないものの、石見清裕氏が唐代の賓礼に関する史料を詳細に分析し、鴻臚客館の構造の一部を復元されている（石見清裕 1998）。氏は、鴻臚客館の正門は北門であったと論証し、かつ鴻臚客館内では外国使（蕃国主・蕃国使）が館の主人であり、皇帝の使でさえ客人であったことを示された。すなわち、皇帝が使を送って蕃主・蕃客と対面する日を伝える儀礼（『大唐開元礼』皇帝遣使戒蕃主見日）の際、鴻臚客館の北門から入った皇帝使は階段を上って建物に入り、



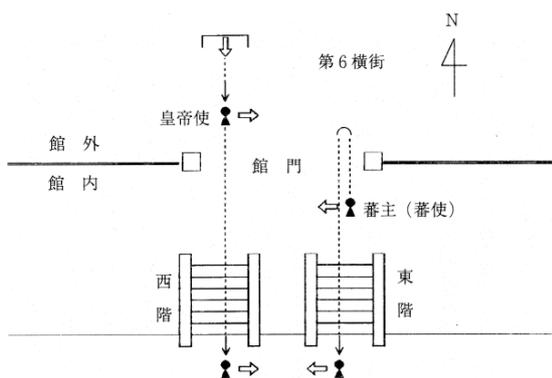
平城京・平安京における客館・鴻臚館の位置(平城京は岸俊男推定による)

西側に立って東の外国使と東西で対面した。唐の賓礼では、東西南北の方位は儀礼と深く関わっており、外交の場ではとくに相手と対峙する方位とそこでの所作（礼のあり方）が問題とされるが、その舞台の一つとしての鴻臚客館では、主従関係で南北に向き合うのではなく、東西の主客関係で対面が果たされたのである。なお、石見氏は両使が建物に入る際の「東階」「西階」を南北方向に向く階段とみて、一つの建物（おそらく東西棟）の中で主客が対面するイメージで想定図を示されたが、これを東西に向かい合う南北棟の階段をそれぞれが上り、それぞれの建物の上から主客対面を行ったとの解釈も可能である。つまり多賀城例にみられるような、並びあう南北棟にそれぞれ上って対面したとみることに問題はない。

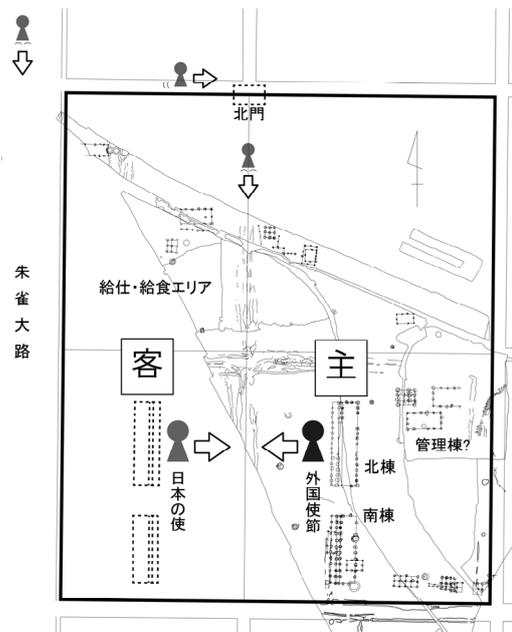
このことは本史跡にも当てはめることができる。

まずは建物の配置である。検出された南北棟群は敷地の東側に並んでいる。また西側は朱雀大路まで十分空間があり、そこに多賀城のように南北棟が並ぶ余地もある。仮にそこに建物が無かったとしても、その空間を利用して対面儀礼を行うことも可能である。前述のように、南北棟で構成される構造は主客対面の機能をみたまもので、客館としてふさわしい構造といえる。しかも通常正殿となるような東西棟がここに無いということは、ここが主従関係を確認する場ではないこと、すなわち正式な外交儀礼の場ではないことも端的に示している。

検出された南北棟群は東側にあるため、客館の主人たる外国使節が入る主殿とみられる。二間庇と荘厳されているのもその故だろう。8世紀末になると南棟が先に廃された。一棟減らした理由は不明だが、入館する外国使節人数に添った措置とも、そもそも外国使節が来なくなって利用が減ったための措置とも考えられる。そうした中で北棟を残したのは、唐の鴻臚客館の賓礼でも北を上としていることを踏まえると、北の優位性を示すものとみてよいだろう。使節の長は北棟に入ったと想定される。



唐鴻臚客館「皇帝遣使戒蕃主見日」
儀式概念図(石見清裕 1998 より)



客館跡の建物配置(井上信正 2015 より)

次に門である。本史跡では推定される門の位置に調査は及んでおらず未確認ではあるが、都同様に朱雀大路に開いていたとは考え難く、東側も丘陵であるため、まずは南北設置を仮定することになる。建物配置からみても南北にあったと想定するのが自然であろう。加えて、福岡市・鴻臚館跡の北館跡でも東門1ヶ所のみが確認されたように、隔離施設でもある客館に門が複数あったことは考えにくい。唐の鴻臚客館の事例から少なくとも北門はあったと考えられるが、仮に北門だけだったとすれば、敷地の奥側となる南半に中枢建物があり、門に近い北半が厨等の給仕施設に利用されている状況は説明しやすい。なお、中国には皇帝の所有物は北側に置くという考え方があり（石見氏のご教示による）、これを敷衍すると唐の鴻臚客館でも皇帝が提供する給仕施設が北側に置かれていたことを仮定することもできよう。

敷地北側に正門や給仕機能を持たせることは、客館内だけを見るとたしかに違和感があるが、礼制機能をもつ北闕型条坊都市のあり方からみると、宮殿・政庁から出向くための門は北門でなくてはならず、それに合わせた客館内の建物配置がとられることは必然性を感じる。さらに、天皇の代理者としての「オオミコトモチノツカサ（大宰府）」が提供するものは天皇が供給するものとみなされるならば、北に給仕施設が置かれたとしても不思議ではない。

このように本史跡の構造をうかがうことができよう。

(6)客館跡と関連施設(大宰府政庁・筑紫館)

高級な出土品の数々は、客館でもてなしを推測させる十分な証拠となっているが、正殿的な東西棟がないことから、客館は正式な外交儀礼・饗応を行う場ではなかった。その役割を担ったのはやはり大宰府政庁だろう。

大宰府政庁は客館の約1km北にあり、客館とは朱雀大路でつながっている。客館を出た外国使節は、幅広い朱雀大路をおそらく隊列を組んで北進し、朱雀門—南門—中門と進み、そして平城宮大極殿前に擬えた政庁正殿前での外交儀礼に臨んだとみられる。唐の賓礼を参考にすると、天皇の代理（使者）が正殿（＝都市中軸）に北坐南面し、外国使節は西南隅で東面あるいは北面したと想定される。そして大宰府の官人らはその東西に位階に応じて屹立していたと想像される（石見清裕 1998）。

なお大宰府は、養老職員令にあるように、外交儀礼とともに行われる「饗讌」すなわち饗宴の役目を担っていた。

外国使節をもてなす饗宴は、都では宮城内で行われている。ただ、外交儀礼とは場所を変えたとき、平城京では大極殿閣門や南苑で行われており、平安京では大極殿院（朝堂院）の西側に設けられた豊楽院で行われた。唐長安城でも、大宝の遣唐使・粟田真人が大明宮で受けた饗宴は、西側の麟徳殿で行われ（『旧唐書』巻199 東夷伝）、外交儀礼が行われたであろう含元殿等ではなかった。こうしたことから、大宰府での饗宴の場も政庁とは異なる場所だったと想定される。その候補として蔵司丘陵上の大型礎石建物や政庁南門前の広場を指摘する意見もある（井上信正 2010 ほか）。

大宰府におかれたもう一つの客館、すなわち博多湾岸に設けられた客館の跡が、福岡市で発見された史跡・鴻臚館跡である。ここは外交が盛んな7～9世紀前半は筑紫館、交易が中心となる

9世紀中頃以降は鴻臚館と呼ばれたことがうかがえ、古代日本の外交・交易の玄関口であった。外国使節をはじめ、遣新羅使（『万葉集』巻15）、唐からの帰国者（円仁『入唐求法巡礼行記』ほか）の利用が伝えられている。

鴻臚館跡の調査では、7世紀末から11世紀に至る5期にわたる遺構が確認されている。客館と重なるのはⅡ期（8世紀前半）・Ⅲ期（8世紀後半～9世紀前半）で、谷をはさんで北館と南館に分かれ、それぞれ堀で囲われ（北館は南北約56m、東西約74m）、それぞれ東門（八脚門）が設けられたと推定されている。内部の建物については、Ⅱ期は詳細不明だが、鴻臚館式瓦が多いこと、南館で掘込地業（建物基礎）が確認されていることから、礎石建物だったと想定されている。Ⅲ期は南館で検出されたような礎石建ち南北棟が展開していると想定されている。なお、鴻臚館と呼ばれた9世紀中頃以降、すなわちⅢ期のおわりからⅣ期のはじめ頃以降は、唐・新羅の商人らが活躍した鴻臚館貿易を裏付けるよう、海外の多種多様な陶磁器類が大量に出土している。ただこの時代も建物についてはよくわかっていない。

筑紫館（鴻臚館）は日本の渡航窓口であった。旧来より筑紫が来朝窓口であることは諸外国に伝えられており（『続日本紀』宝亀4年（773）6月戊辰条）、外国使節はまず筑紫館に入ったとみられる。大宰府が使節の来着を朝廷へ報告すると、使者が派遣され、身体検査や荷物を調べ来朝理由を尋ねた。その報告を受けて朝廷は入京させるかどうかの判断を行った。入京の場合、筑紫館を立ち、難波館を経由して京内の客館（鴻臚館）に入った。天皇謁見をはじめ一連の外交日程を終えると、再び筑紫館に戻り、風待ちをして帰国の途についた。

筑紫館（鴻臚館）は大宰府の海辺の客館でもあった。外国使節が入京しない場合、大宰府で饗応が行われることがあり、外国使節は筑紫館から直線にのびる官道で水城西門－推定羅城門－朱雀大路－客館と進み、既述のように大宰府で外交日程を終えると、筑紫館に戻り、風待ちをして帰国したと復元される。なお客館内の使節滞在場所とみられる北棟は260㎡、南棟は200㎡程度であり、数百人規模の受入は困難である。実際に大宰府へ来たのは使節代表を含む一部で、他は筑紫館で待ったとみられる。

このように筑紫館（鴻臚館）は、大陸に開かれた渡航窓口となる海辺の客館であった。そして筑紫館と条坊内客館の関係は、畿内における難波館と京内客館との関係に比定することができ、両者がともに機能したということができよう。

以上のように、本史跡を概観し、事例比較や当時の賓礼のあり方を通して、本史跡は客館としての性格を十分満たしていることがうかがえる。大宰府の外交・応接のスタイルは、朝廷が都で行ったものと同様、東アジアの国際標準に則ったものだったとみてよいだろう。

(7)大宰府のその後

9世紀になると新羅使が来日しなくなる。渤海使はこの後も続くが、朝廷が「筑紫道」すなわち大宰府経由で入京するよう求めるものの（773年）、能登や秋田に来着するようになった。こうした状況もあり、大宰府条坊内の客館は9世紀中～後半頃に廃され、畑となったとみられる。この頃、平安京東鴻臚館が廃され（839年）、難波鴻臚館も摂津国府となることも（844年）、一連の施策だったと考えられよう。

ただ、博多湾岸の筑紫館は9世紀半ばから「鴻臚館」と呼ばれるようになり、引き続いて唐・新羅の商人との交易が盛んに行われた。これが11世紀代まで続いたことが、古文獻また鴻臚館跡の調査から窺うことができる。

さて大宰府は、941年藤原純友の乱で8世紀以来の政庁が焼亡するが、すぐに再建された。11世紀には条坊内外の広範囲に貿易陶磁を伴う遺跡が広がり、博多湾岸と関わって交易で栄えたことが窺われる。ところが11世紀末～12世紀初頭になると、政庁は廃され、条坊内に広がっていた宅地も一気に廃され、生活の場はごくわずかとなる。条坊に伴う道路や区画溝も管理されなくなり、街の中心は、条坊東北部（観世音寺・五条・天満宮周辺）、寺院が点在する四王寺山や宝満山の麓に移っていった。12世紀代にも条坊を「○郭○条○坊」と呼称していることが古文獻に記されるが、観世音寺や宇佐八幡（大分）などの寺院や府官らの所有であり、ほとんどが田畑と記録されることも遺跡の現状と符合している。

条坊に関する古記録は1148年を最後に無くなる。その後については遺跡でもあまり手がかりは無く、田畑や原野だったと推測される。ただ、中世に遡るとみられる市町、すなわち五条、二日市が、それぞれ条坊の東端、南端に位置することから、市町が条坊縁辺部で発生したと想定する見解は注目される（宮本雅明1998）。条坊内の土地権益が依然として維持されていた可能性がある。

鎌倉時代になると、関東御家人の武藤氏が守護として大宰府に拠点を置いた。武藤氏は大宰府の次官「少弐」に任命されたことを機に、自ら少弐氏と名乗り、元寇では「日の大将」として日本軍の先頭で戦い、筑前・豊前・肥前・壱岐・対馬を管轄する北部九州最大の守護大名となる。このころの街は、四王寺山東南麓から宝満山西麓にかけて広がっていた。少弐氏の居館、山岳寺院、観世音寺がその中心にあり、また五条地区では条坊区画を引き継ぐ街区が広がり、その縁辺には銚ノ浦遺跡で知られる鑄造工房などが稼働していた。いずれの地点でも、引き続き貿易陶磁が大量に出土することから、海外交易で潤っていたことが窺える。

南北朝時代には、太宰府は争乱の舞台となり、その後、博多に室町幕府の九州探題が置かれ、政治の中心が博多に移った。これにより太宰府は急速に衰退し、引きつづき都市的景観が残るのは、観世音寺周辺、太宰府天満宮周辺となり、その他は散村的な景観となったとみられる。そして、戦国時代末期の争乱で街は大きく荒廃した。

その後、筑前に入った小早川・黒田家によって太宰府天満宮の再興が図られ、周辺は門前町へと姿をかえた。農村部でも中世以来の村が社会の基本単位となり、そのまま昭和30年代までは景観変化は少なかったとみられる。条坊の痕跡もよく留めていたようで、そのようすは古地図、字図から読み取ることができる。

高度経済成長期になると、福岡と筑紫平野をむすぶ北西－南東方向にのびる鉄道・国道などの幹線を基準として、開発が盛んに進められるようになった。開発の圧力は強く、古い景観や土地割は次第に失われていった。

なお客館跡地には、大正13年（1924年）に九州鉄道株式会社（現在の西日本鉄道株式会社）の福岡－久留米間の電車軌道敷設とともに、「二日市操車場」と呼ばれる工場・車両基地（車庫）が設置された。昭和62年に筑紫車庫（筑紫野市）に移転するまで稼働している。

(8)客館と推定した理由

本遺跡を客館跡と推定するにあたっては、以下のような事項が根拠として挙げられる。

a)本遺跡の内容

- ①朱雀大路沿いで、条坊内最大級かつ格式の高い大型南北建物群を検出した。ただ、一般官衙にみられる正殿となるような東西棟は持たない。
- ②大宰府に関わる公的施設であることを示す「仕丁」関連木簡が出土した。
- ③日本・唐・新羅産高級食器等の出土が集中する。その種類・量は、大宰府関連遺跡群の中でも特筆すべきで、ここにあった施設の性格を裏付けるものとみられる。

b)客館の推定

- ①大宰府条坊の動向は、古代宮都の動向との関係が深いことが明らかとなっている。
- ②宮都朱雀大路沿いの公的施設として、客館（鴻臚館）の存在が知られている。
- ③唐の賓礼復元研究では、客館は北門を正門とし、客館内賓礼は東西相対を基本とした。本遺跡も対象地南に施設の中核があり、建物配置から東西対面が想定できる。

c)外交関連施設との関係

- ①大宰府政庁とは朱雀大路を介して、筑紫館とは朱雀大路一条坊南端路－水城西門を通る官道を介してつながっている。
- ②筑紫館と本遺跡の関係は、難波館と京内客館の関係に等しい。
- ③施設の設置は、奈良時代の「造客館司」設置時期と重なる。（『続日本紀』天平4年10月癸酉条）廃絶時期は、平安京東鴻臚館廃止（『続日本後紀』承和6年8月12日条）、難波鴻臚館廃止（『続日本後紀』承和11年（844）10月戊子条）などと重なる。

【参考文献】

- ・岸俊男「遺存地割・地名による平城京の復原調査」『日本古代宮都の研究』岩波書店
- ・宮本雅明「大宰府の都市」『太宰府市史－建築・美術工芸編』太宰府市、1998年
- ・『西日本鉄道70年史』西日本鉄道株式会社 1978年
- ・『西鉄創立80周年記念 明日に翔ける』西日本鉄道株式会社 1988年
- ・石見清裕『唐の北方問題と国際秩序』汲古書院 1998年
- ・森 公章「大宰府および到着地の外交機能」『古代日本の対外認識と通交』吉川弘文館 1998年
- ・井上信正「大宰府朱雀大路沿いの大型建物群と出土品」『都府楼』第42号（財）古都大宰府保存協会 2010年
- ・鈴木琢郎「蝦夷の朝貢・饗給と多賀城－南北大路隣接地の大型建物群の理解をめぐって－」『福大史学』82 福島大学史学会 2013年9月
- ・井上信正編『大宰府条坊跡44－推定客館跡の調査概要報告書』太宰府市の文化財第122集 2014年3月
- ・菅波正人「鴻臚館への道」『海路』第12号 海鳥社 2015年7月
- ・井上信正「西の都」大宰府と外交施設『新羅王子がみた大宰府』九州国立博物館 2015年9月

中国	中国東北部	朝鮮半島	日本
		飛鳥時代	
		奈良時代	
		統一新羅(676-693)	
	渤海(698-926)		
唐(618-907)			
		平安時代	

大宰府の外交・客館 年表

▼印 外国使節の大宰府来訪、
また、その可能性のある記事
▽印 那津の筑紫館・鴻臚館の記事

- 大宝元(701) ○大宝律令制定
- 和銅3(710) ○平城京に遷都する。
- 養老2(718) 大宰府管内諸国の庸を元に戻す (※この頃、大宰府政府が完成)
- 天平2(730) 大宰帥 大伴旅人宅で、梅花の宴。(万葉集)
- 天平4(732) ▶新羅使を、大宰府に召す。(→入京)
- 天平4(732) ●始めて「造客館司」を置く (※大宰府客館もこの頃から造営開始)
- 天平6(734) ▶大宰府、新羅使の来泊を伝える。(→入京)
- 天平8(736) ▷遣新羅使が筑紫館に至る。(万葉集)
- 天平10(738) ▶大宰府に使いを送り、新羅使を饗応する。
- 天平14(742) ▶大宰府(筑前国か)に右大弁を送り、新羅使を饗応する。
- 天平15(743) 筑前国司、新羅使来朝を伝える。常礼を失しており放却する。
- 天平勝宝4(752) ○東大寺大仏開眼
- 天平勝宝4(752) ▶大宰府、新羅王子の来朝を伝える。(→入京)
- 天平勝宝5(753) 鑑真、唐より大宰府に至る。
- 天平勝宝6(762) ▶大宰府に 参議 藤原真光を派遣。唐人沈惟岳を饗応し、祿を賜う。
- 天平勝宝6(762) ▶大宰府に 唐人 沈惟岳ら着く。先例により、安置・供給する。
- 天平勝宝7(763) ▶新羅使来朝。左少弁を派遣して新羅使を尋問。
- 天平勝宝8(764) ▶大宰博多津に新羅使到着。右少弁を派遣して来朝理由を問う。
- 宝亀元(770) ▶大宰府に命じ新羅使を安置・饗応する。
- 宝亀5(774) ▶大宰府に、新羅使至る。河内守紀広純を派遣して来朝理由を問う。
- 宝亀10(779) ▶大宰府、新羅使の来朝理由を問い、国書の案を書し京進。
(→唐客と入京)
- 宝亀10(779) 唐使、入京する。
- 延暦3(784) ○長岡京に遷都する。
- 延暦13(794) ○平安京に遷都する。
- 延暦22(803) 最澄、竈門山寺(宝満山)で渡唐を祈り、薬師仏4体を彫る。
- 大同2(807) 空海、唐から帰国し観世音寺にとどまる。
- 承和3(836) ▶大宰府に命じ、遣唐使を再発時まで「府館」に安置する。
- 承和4(837) 遣唐使、平安京の鴻臚館より大宰府に向けて出発する。
- 承和6(839) ●平安京東鴻臚院の地二町を典薬寮御薬園とする。(※東鴻臚館の廃止)
- 承和6(839) ▶遣唐録事の大神宗雄が帰国。大宰府に命じ「客館」に安置する。
- 承和9(842) ▷大宰府の要請に対し、新羅商人との交易は許すが
鴻臚館に安置・給食は認めず。(※大宰府鴻臚館の初見記事)
- 承和14(847) ▷円仁、唐から帰国し鴻臚館前に到る。
- 仁寿2(852) 承和5年(838)春頃、大宰鴻臚館に唐人沈道古が滞在と記す。
- 延喜元(901) ○菅原道真、大宰府に左遷。
『延喜式』 ▶「大宰府に仕丁を充てる。…客館を守るに一人、…」

那津(福岡市)にある客館の名称↓
西鉄操車場跡地の土地利用↓

筑紫館
客館

鴻臚館
畑

4. 遺跡の価値

(1)客館跡としての遺跡の価値

本遺跡は、奈良～平安時代初めにかけて外国使節を安置・供給する客館と推定される。

これは中国系都城におかれたいわゆる京内客館の一つとみられ、漢魏洛陽城の四夷館、隋唐長安城の鴻臚客館、平安京鴻臚館などが知られているが、これまで考古学的な情報を得られた遺跡はなく、東アジアの中でもたいへん貴重な遺跡といえる。出土品からも当時の交流の具体的な様子をうかがうことができ、重要な考古学的価値を有している。

(2)大宰府における外交の様相を伝える価値

本遺跡が朱雀大路沿いに位置することや、確認された施設配置のあり方は、唐の賓礼にみる鴻臚客館（京内客館）復元との親和性が認められる。これは、古代日本が国際標準となる唐の賓礼を導入したことを示すものであり、外国使節を迎える大宰府でも、賓礼を行うため宮都同様の整備が行われたことを示している。このことから、外交の場の中心は政庁域にあり、都市全体も賓礼の舞台として機能したという想定も導かれる。

つまり本遺跡は、当時の東アジアにおける外交儀礼の舞台や賓礼の様相を伝える遺跡として、かつ東アジア外交・交流を担った大宰府の役割を示す具体例として、歴史的価値を有している。

(3)大宰府条坊としての価値

対象地を含む一帯は、大宰府条坊内では最大の広域調査事例である。この調査により、奈良時代の朱雀大路東側溝や左郭の条坊道路が検出され、それまでプランの特定が難しかった大宰府条坊の方格地割の具体的な位置や変遷に関する情報が得られることとなった。これをもとに、条坊のプランやその範囲・設計について文献史料との対比もふまえて研究が進められている。さらにはここで7世紀第4四半期の道路側溝・条坊区画内溝が確認されており、数少ない条坊成立期の遺構・遺物として注目されている。

本遺跡は、大宰府条坊の成立・廃絶過程、都市構造などの解明に寄与する学術的・学史的な価値を有している。

(4)地形・地理が形づくった要衝としての価値

古来より流通往来の中心となっていた史跡地及び周辺は、現在においても九州自動車道や国道3号、福岡都市高速道路、JR鹿児島本線、西鉄天神大牟田線及び太宰府線など、主要な交通動線が集中する場所となっている。

このことは、当該地が流通往来にとって非常に重要な役割を果たしてきた好地であることを示しており、大宰府周辺の地形・地理は、こうした交流や交通の要衝として時代を超えて踏襲されてきた価値を有している。